慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	自閉スペクトラム症児に対するコミュニケーション支援研究の軌跡
Sub Title	
Author	井上, 雅彦(Inoue, Masahiko) 石塚, 祐香(Ishizuka, Yūka) 山本, 淳一(Yamamoto, Junichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.93 (2022.) ,p.[113]- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本淳一先生退職記念
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000093-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自閉スペクトラム症児に対するコミュニケーション支援研究の軌跡

井上雅彦[1]・石塚祐香[2]・山本淳一[3]

鳥取大学大学院 医学系研究科[1]・筑波大学人間系[2]・慶應義塾大学 文学部[3]

井上先生は，社会学研究科で長年集中講義を務められている経緯もあり，山本先生との対談企画となりました（石塚は編集に徹することにしました）。井上先生は山本先生の5つの論文を中心に対談を進めてくださり，井上先生だからこそ引き出されたお話の分量は原稿30頁に及びました。対談を通して，山本先生の研究は「形式論」に切り込むための挑戦であり，その基盤には「機能（function）」を突き詰めていくという徹底的行動主義の見方があるのだと改めて実感しました。私もこうした研究への向き合い方を引き継いでいきたいなと思います。

井上雅彦先生（以下，井上）が，山本淳一先生（以下，山本）に，山本先生の代表的な論文とその執筆時の背景や思い出に関するインタビューを実施していただきました。

1.「機会利用型指導法とその汎用性の拡大：機能的言語の教授法に関する考察」

井上：私が山本先生を最初に知ったのは，出口・山本（1985）の機会利用型指導法の論文でした。当時，私たち筑波大学の院生たちはめちゃくちゃ読んだ論文ですね。当時1980年代後半は日本でもLovaasのDTT（Discreate Trial Teaching: Smith, 2001, 2010）が主流で，統制した場面で恣意的な強化子を使って，反応を引き出していくっていうものでした。行動的アプローチを象徴する「強力な指導法」と言われていましたが，一方では般化・維持につなげるためには，統制を弱めて自然な強化子を使わないと駄目だという話にもなっていた頃だと思います。この当時のこと，少しお話しいただけますか。

山本：出口光さんがアメリカのカンザス大学でPh.D.を取って日本に帰ってこられて，明星大学に赴任をされる前あたりに「日本で自閉症児の支援ってどうやっているの？」と聞かれたので，「DTTをやってます」と答えたんだよね[注1]。すると彼は「Lovaasは週40時間モデルだよね」（Lovaas, 1987）と指摘したんだよね。あと「日本ではどのぐらいの時間やってるの？」って聞かれて，「週1回くらいです」と答えたら「それだと効果が上がらないんじゃないの」って言われたんですよ。じゃあ，支援の効果を上げたり，般化・維持につなげたりするには何が必要かと考えたときに，時間の問題ではなく，機会の問題なのではと考えました。つまり学習の機会の絶対数が少ない。出口さんと議論していく中で，日本の中では教育・家庭環境の中にできるだけ沢山の機会を設定することで，米国のLovaasによって得られたエビデンスを実現できるのではないかというアイディアが出てきました。その時に出口さんからincidental teaching（Fenske, Krantz & McClannahan, 2001）を紹介されて，調べてみたら日本語では偶発的指導法または偶発的教授法（incidental learning）と呼ばれていたんです。でもこれだと，いわゆる古典的学習理論のマウラーの偶発学習と混乱することが多いので，学習機会を設定する指導法という点を強調するため機会利用型指導法という名前で売り出したわけです。

井上：この論文をよく見ると，function（機能）っていう言葉がすごく出てきます。機会利用型も機能

で考えなきゃいけないという着眼点はすごく新鮮でした。

山本：そこがポイントですね。出口さんと，フリーオペラント法（佐久間，2013；先行刺激の統制を緩め自然な人の反応を強化子としていく方法）は学習機会をどう設定するのかという議論になったんです。行動レパートリーがない子はいくら待っても反応が出てこないという問題があるんだから，統制された場面でシェイピングして行動形成を行って，さらに統制を弱めた場面で自発的な行動を生み出す。そういうオペラント行動に対するオーソドックスなやり方で十分に般化・維持を進めていけると考えました。そうすると，ガチガチに統制したトレーニングと，緩やかな統制のフリーオペラント法もどちらも一次元上で設定できます。この一次元の設定というのが，まさに井上さんが言った function なんですよ。要するに function を徹底的に詰めて考えれば，強い統制の中で行動を形成したら行動のレパートリーとして定着しやすいことは間違いない。でも別の刺激下ではその行動が出てこないということは必然です。統制がきつすぎるから般化・維持ができないとか，どっちかだけをやればいいみたいな話ではなくて，function というキーワードを設定すれば，僕らのやっている仕事は全部包括的に見える（山本・加藤，1997）。

井上：Function の話と関連するんですけど，この論文を改めて読んでみると，Hart and Risley (1978) などと違うのは，汎用性の拡大，適用範囲の拡大が強調されているところだと思いました。出口・山本（1985）には刺激性制御っていう言葉も出てきていて，この後の山本先生のさまざまな研究のキーワードになっていくものが，この論文に詰まっていると思っています。自閉症のコミュニケーション指導の際に，常にその行動の機能に注目して，刺激性制御を緻密に分析していくというのが，「私たちが今何を対象児に教えようとしているのか」を分析するための唯一の枠組みになるんだということで，この論文はある意味，応用行動分析学によるアプローチの原点かなと当時思いました。

2.「自閉児における刺激等価性の形成」

井上：この論文（山本，1987）は，自閉症のある子どもが言語や「認知的概念」と呼ばれているものをどう学んでいくのかというところを，非常に精緻に分析されたものだと思うんですが，当時，先生が刺激等価性に着目された理由やきっかけを教えていただけますか。

山本：文脈は明確で，華のある研究がしたかったからです。慶應の博士課程の授業で，週 1 回全ての教員，その中には小川隆先生，佐藤方哉先生，小谷津孝明先生，渡辺茂先生がいらして，その前で 1 人ずつ 90 分発表するコロキウムという授業があったんですよ。そこで華があるのは，動物実験と認知心理学なんです。発達とか，動機づけとか，シェイピングとかは，僕ら臨床家としては，インパクトがあったけれど，臨床や発達を研究していた博士課程の学生は僕しかいなかった。だから僕が応用行動分析学のことを発表しても，反応が薄かったので，研究として華を持たせたいと思ったんです。その時に Sidman et al (1982a, b) の等価性（equivalence）論文が出てきたので，それを発表したら，みんなが食いついてきて議論が盛り上がりました。あと認知発達のドメインは，研究パラダイムを作ると，研究がどんどん広がる実感がありました。特に自閉症の子とのお付き合いの中で，聞いて何かを選ぶ，見て何かを選ぶことを実験の方法論の中に落とし込むと，マッチングや，言葉の理解（comprehension），音声表出（production）などの臨床のことを全部入れこめるので，Sidman が言う，反射性（reflexivity），対称性（symmetry），推移性（transitivity）の 3 つの関係性を 4 つとか 5 つぐらいに広げられるのでは，と思いました。この後，臨床家や行動分析家の多くが「自閉症児は等

価性ができないっ」と言ってたんですけど，そんなことはないと思って。研究者魂が揺さぶられて，ちょっと勝負をかけてみようという思いで始めました。この論文のお子さんたちのことはよく覚えていて，ある程度話す子たちなのだけど，無意味図形（視覚刺激のみ）を使ってトレーニングとテストを行って，等価性が成立した後，無意味刺激をネーミング（命名）してもらったら，等価関係のある刺激に共通のネーミング反応は現れなかった。ということは，命名とは独立に刺激と刺激との関係の学習がなされたということです。そうすると，この刺激間関係の枠組みに，新たに音声刺激と音声反応を入れることもできるし，絵カードとか文字とか漢字とかも入れることができるのではと考えた。読む，書く，理解する，表現するなどの支援方法を共通の枠組みで構築できるという，次の臨床のビジョンがこの論文でできたかなと思いました。

井上：そうだったんですね。自閉症のお子さんで刺激の類似性を飛び越えて，機能として関係性が成立して行動が広がることは，僕にとって非常に衝撃的でした。今までの刺激過剰選択性理論から見たら，どう見えるんだろう，みたいなことを当時考えていました。

山本：実は僕が 1 番最初に書いた論文は，慶應義塾大学の社会学研究科紀要に出した刺激過剰選択性の論文（山本，1985）なんだよね。自閉症の子は刺激過剰選択性があるっていうことは，Lovaas，Koegel，Schreibman たちのグループが，データをガンガン出していて，視覚系と聴覚系の過剰選択性を全部網羅的に調べていたんです。ただ，複合刺激を提示して，そのもとでの反応を形成し，その後，刺激要素を個別的に提示してそのもとでの反応を調べるという研究パラダイムがほとんどなのです。ということは，「刺激過剰選択してもいいですよ」と言ってるような課題なんですよ。例えば，りんごと言って，りんごをとるのと，リンゴの写真を見てりんごをとるという両方の刺激性制御の実験的な仕掛けがないと，複合刺激を出すだけでは過剰選択させちゃうことになる。自閉症児が刺激過剰選択を示すのは，実験パラダイム上の問題だと気づいたわけです。ただ，当時，注意を配分するような研究パラダイムを使った論文が 1 つだけあったんですよ。それにぐっときて，今後の研究はこれだって思いました。臨床介入研究のビジョンができたので，論文の最後にきっちり書き込みました。刺激過剰選択性の研究の時には，1 次元の中の視覚系・聴覚系ぐらいしか考えなかったけれども，等価性を考えると，運動系もこの中に仕込めるので，表出言語も含めて全部ここに入れられると考えた。論文をひたすら書いてた頃のことを考えると，最初に紀要で書いた論文が伏線になって，刺激過剰選択性が等価性になってきた。これは全く唐突なものではなくて，やっぱり「自分が考えた後のつみ残しあるからそれをまた次の論文で考える」という感じです。

井上：ありがとうございます。山本先生は佐藤先生の実験系の研究室で学ばれたので，単に刺激の過剰選択性という訓練パラダイムの話じゃなくて，そこでいったいどういう学習が存在してるのかというところが，この刺激等価性の論文をはじめ，その後のさまざまな認知に切り込む話（山本，2009）になっていくのかなと思います。当時は当たり前だと思われてたトレーニングのパラダイムをもう一回整理し直してみるときに，応用行動分析学の非常にベーシックな実験のあり方が重要なんだというのは，私たちが学生のころから言われていたので，すごく大きな学びでしたね。

3.「発達障害児における “内的” 事象についての報告言語行動（タクト）の獲得と般化」

井上：山本先生が明星大学に移られて，マンドからタクトの研究へとより広がっていきます。これは「私的な出来事」というところに初めて切り込んだ論文だと思うんですが，この研究はどういうとこ

ろから着想されたのですか。

山本：おそらくこの背景には大学院時代の教育があると思います。学部の頃に Verbal Behavior（Skinner, 1957）の解説本（ウィノキュア, 1984）を読んで，佐藤先生から「Chomsky はこう言ってるけどさ，行動分析学では言語をこう考えているんだよ」という話があって。大学院の時には，佐藤先生のゼミで，毎週，内的事象，私的事象をどう扱うかという議論をしていたので，言語行動と私的事象という 2 つのキーワードが出てきた時に，それらをくっつけると結構面白い研究ができるのかなと，潜在的にはずっと考えていました。それで刎田文記君とタクトの研究をやろうとなって。研究って，やっぱり「人がやってないことをやる」ことが身についているんですよ。心の中の状態を相手に伝えることができるのが言語行動の基本なのだから，聞き手っていうキーワードも出てきて，このテーマで実験系を作りました。そういう色々なパーツを持ってきて，がらがらポンって統合してみると面白い組み立てができることが，研究者・臨床家の両方での面白みなのかなと思うんですよね。

井上：これはマンド指導の「御用学習場面」と同様のすごい画期的なトレーニングユニットだったと思うんです。報告行動のネタとしてのフリーな場面に近い場面を技術的に作った上で試行数も稼げるし，いろんな統制条件も入れられるので，僕たちとしては画期的なものができたなと思いました。僕も当時，子どもの報告に反応してくれる聞き手と，全く反応しない聞き手の選択場面で，ASD のある子どもがどちらに報告するのかという選択の実験を始めたんです。やってみてわかったのは，タクトの文脈でマンドを教えてたかもしれないなということなんです。予想に反して報告に全く反応しない人を聞き手として選択して報告する子どもが出てきて，当時の僕はすごい衝撃を受けました。反応しない聞き手に報告して，次の遊びに行くんですよね。報告を終えると早く遊べる，終わって帰れると思っていたのかもしれない。指導者が意図しない大きな別の随伴性で動いてるなというのが，聞き手の選択の実験をやって改めてわかったんです。この刎田さんとの研究で言うと，般化テストで遊び課題の性質によって報告言語行動（タノシカッタ，ビックリシタ）などに分化していったところが面白い。あと，「ビックリシタ」という報告も，もう何回かやると「タノシカッタ」って報告していて。僕たちもある遊びを何回かやっていくと，つまらなくなったり，逆に面白くなったり変化するので，これはエラーじゃなくて，うまく使えるようになっているのかもしれない。言語機能がはっきりとわかるのでこの研究はすごく面白い。

山本：やっぱりキーワードは function なんだよね。ただ，その function って先験的には分からない。いわゆる語用論（pragmatics）の研究者が日常の様子を観察して，相手に対する親和的な言語だ，文脈の理解だとか色々分類してるけど，それは形式だし，その働きの実際のところは，わかんないんですよね。だから僕らはむしろ少し自然な場面で人に伝えるとか，日常生活の中のユニットを分析できるようにする訓練パラダイムをつくりました。内的事象に関係することばを言ってるけれども，マンド的な機能があるのかもしれない。分類としてはどちらかわからない。ただ，このパラダイムを使って，聞き手を制御変数として操作すると，話が盛り上がらない人（聞き手）に話に行って早く課題を終えたい子たちもいるとわかれば，形式的な言語反応でなく，言語の機能を調べられるということができると思うんですよ。

井上：僕もこの頃から今に至るまで，普段の臨床の中でも，行動を「機能」で考えるというのは影響を受けているなと思います。この頃の先生の研究は，授与動詞（清水・山本，1998；山本・清水，1998）とか，質問応答とか色々な言語機能に広がっていったと思うんです。発達心理学では，自閉症のでき

ないことを指摘する研究が多かったけれど，先生のこの頃の研究っていうのは，発達心理学の研究の裏返しをやってみせるみたいな感じが，僕としては痛快だなと思っていました。

4.「発達障害児における文章理解の指導：情緒状態の「原因」を推論する行動の獲得」

井上：次は，奥田さんの論文（奥田・井上・山本，1999）ですね。日本行動療法学会の内山記念賞を受賞した論文です。当時，僕が非常に興味持ってた心の理論も高次条件性弁別のパラダイムでいけるんじゃないかと考えていました。言語行動を，感情の読み取りの部分で，内的事象を外的刺激に置き換えたところですが，高次条件性弁別と心の理論について，先生はこの頃どういう風に考えておられたんですか？

山本：自分の頭の中に Sidman の研究法を，臨床研究にうまく組み仕込んでいくと，階層性ってキーワードが重要だと思うようになりました。行動分析学が認知と戦っていくための 1 つの仕組みとして，フラットな等価関係を制御するもう 1 つの上の条件があるのではないかと考えていました。そうするとそれが高次条件性弁別になる（山本，2001）。認知心理学の人たちは，言葉の理解について話をしているけど，人によって何を言葉の理解って定義するのかとか，理解できたかできないかという基準があいまいで。だから，ある程度シンプルな文脈刺激の下での刺激等価性のパラダイムを設定した上で，高次の刺激を見つけることができれば，言語の理解に関してもっと臨床的に面白いことができるはずだと思ったんです。それがこの奥田さんの論文であり，僕が清水裕文君とやった授与動詞の論文（清水・山本，1998；山本・清水，1998）。語用論の立場から，自閉症児は視点取得（perspective taking）ができないと言われていたので，相手の立場に切り替えることができるのかを実験パラダイムに組み込めないかと思って清水君と研究を進めたんですよね。

井上：この頃は山本先生が，認知心理学（山本・楠本，2007）や発達心理学（山本・國枝・角谷，1999）の雑誌で行動分析学的な視座を持った論文を書かれてたのがすごく印象的でした。行動分析学でどこまで切り込めるかという挑戦でもあったと思うんです。僕も奥田先生と研究をしていて，1 つ壁にぶち当たったのが，こういう文脈刺激を作れば学習ができるのに，なぜ通常の教育環境の中で彼らが学習しないのかということなんです。人の反応が読み取れたとしても，自分のこだわりを優先するみたいな反応選択があって。やっぱり多様な条件性弁別を作り上げていくのは，強化子の問題から避けて通れないなという話になったんです。この問題って，今のテクノロジーで考えると，例えば自分が頑張って読み取らなくても，表情認識をして，スマートグラスに「石塚さんが怒ってるかもしれないぞ」と表示されるような時代になってくると思うんですよね。そこが上手くいけば，自閉症の心が読めない論争というのも，そういう環境の用意があると果たして使うのかどうかみたいな話になりますよね。

山本：オプションを持つということですよね。例えばその自閉症のある人たちが，仕事に関してはやっぱり文脈を読みたいのならば，そこにテクノロジーを入れてサポートするし，友達や趣味に関してはもうオープンに自分の好き勝手なことをやりたいのであれば，必要ないと思います。テクノロジーをうまく活用することで，その障害みたいなものをあまり意識しないで，行動できることもありえるよっていう，本人が選べる提案にもなるかなと。

井上：そうですね。こうした考えが新しい時代の障害の概念になっていけばいいかなと思いますね。この後の先生の研究は，リハビリテーションの領域とか，様々に広がっていきますよね。

山本：山﨑裕司さん，鈴木誠さん，長谷川輝美さんなど，色々な人と研究を進めてきました。出発はゴリゴリのリハの人たちが筑波大学の夜間修士課程にきていて，僕の授業を東京キャンパスで受けていました。僕の授業を聞いたり，映像を見たりしていると，それでぐっと入っていって，あとは自分たちで色々と作られていった感じなんです。夜間修士の授業がなかったら，きっと行動リハビリテーション（山本，2012）を学問分野として構築できなかったので，筑波大学のおかげというところでもあるんですよ。

5.「徹底的行動主義と応用行動分析学：ヒューマンサービスの科学・技術の共通プラットフォーム」

井上：慶應に戻られてからの先生の自閉症に関する研究は，言語獲得の中核みたいなところに迫る臨床研究が増えましたよね。また早期介入では，ADDS の熊仁美さんたちの実践しておられるプログラムや，その原型となった KEIP（慶應早期発達支援プログラム）の開発（山本・松﨑，2014, 2016）や，前言語的な行動の獲得過程を行動分析学的に整理していくというお仕事（山本・直井，2006）の 2 本立てなのかなと思いました。

山本：Lovaas（1987）のプログラムは非常に発達的に合理的なカリキュラムを作ってるんですよ。でもその前の段階にある注意，共同注意や遊びまではカバーしていなくて。言語模倣，動作模倣あたりからそこを基盤にして作り上げているので，その前の共同注意とか大人への関心だとか，社会的な強化子のあり方も盛り込むことが重要だと思っています。共同注意も自閉症ができないと言われているから，他の学問領域とどう接触して支援研究のアイデンティティを売り込んでいけるかということで研究テーマを見つけたり，考えていました。

井上：先生の 1 番最近の業績で徹底的行動主義が出てくるでしょう（山本，2021）。今までの先生のご研究の集大成という感じで様々な話題が出てくるんですけれど，自閉症の “happiness” というか，自閉症という障害がある人に対して徹底的行動主義という哲学と応用行動分析学というツールを使って，今後どういうことができるだろう，ということについて，最後お聞きしたいです。先生の視点から見て，本日のテーマでもある自閉症のコミュニケーションに行動分析学が，今後どのようなポイントで貢献しうるだろうかというところですね。

山本：それこそ原点回帰だけれども，機会利用型指導法的な，日常の機会の中で，ポジティブな interaction をうまくひろって，いい言葉をかけて，子どもも親も強化されるような環境作りが重要かなと思っています。松崎さんと一緒につくっているあのアプリ（松﨑・前田・山本，2019）を親に活用してもらって，子どもができるようになったら別にアプリはいらないよというのが，ある種，健全な形だと思っていて。親御さんと子どもたちが日常の中で喜びを感じるネタを作って共有していくような仕組みができないかなと思っています。本来親御さんが感じるその子どもが成長していくことの喜びとか，自分が関わっていく中で，純粋に子どもの変化とか反応が親御さんの強化子になっていく仕組みをアプリでアシストしていく。それがやっぱり徹底的行動主義の基本の機能と機会の設定という部分のキモのはずなんです。要するに，子育てのユニバーサルなものを提案できると思うので，それは少しずつ進めていきたいなと思っていますね。そのためにはやっぱり注意を向けるとか，共同注意や模倣，マンド，タクトとかをうまく小ネタで日常の中に入れ込んでいって，それが総体として “happiness” を生み出して行くというイメージかな。僕はやっぱりずっと形式論と闘ってきたような気がするんだよね。要するに，自閉症なんだから，このプログラムやらなくちゃいけないとか，小

学校に入ったら，学校の適応をがんばらないといけないとかね。それはある種，制度がそういうふうになってるから。それは便宜的なもので，そうじゃなくても良いわけだから。支援の目標として，学校で困っていることにとらわわれることがあっても，学校という環境は，勝手に人間が作ったのだから，そこでハッピーになれればいいけれど，そうじゃないんだったらその子どものハッピーを優先するような方法をつくることが重要だとと思うんですよね。「45 分間座っている」というのは，とりあえずの便宜的なものだから。「現在あるまわりの考え方や自分の考え方にとらわれたまま，それに従って，子どもたちを何とかしたいと思い込んでしまう」，というふうにならないようにしたい。僕のあの徹底的行動主義の論文のエッセンスを親に学んでもらうというか。論文を読んでくださいと言わないんだけど，日常生活で，楽しい相互作用の小ネタをずっと 3–4 年間ぐらい繰り返せば機能が重要だよねってわかってくると思う。やっぱり子どもの行動の意味をまず理解してから，大人が次の提案をしてなくちゃいけないよねとか，ストレングスを見つけないといけないよねとかいうことが，日常生活であたりまえになるような仕組みを作りたいなと思ってます。

井上：ありがとうございました。僕が先生の研究に触れたり，自分で研究をする中で，思い知らされたのは「自分が自閉症のある子どもたちに教えてたコミュニケ―ションって，いったい彼らにとって何だったんだろう」とか，「本当にこれが強化子だったんだろうか」というような，方法論的な行動主義の「当たり前」に対する疑問でした。function で徹底的にみていくという徹底的行動主義が身につくと親も教師も成長できるんじゃないかなと思います。自閉症の臨床に限らず，人や動物は強化子が多様にあるということが非常に重要だと思うんです。多様な強化子にアクセスする機会があって選択できる状況をいかに親御さんや子どもに作ってあげられるかが徹底的行動主義と言われるものの，哲学の一つじゃないかなという風に思いました。この前，望月昭先生がお亡くなりになられて，望月先生の対人援助学（望月・武藤，2016）の論文を見ていた後に，今回の山本先生のこの論文を読ませていただいたんですが，望月先生の論文との類似点をすごく感じました。望月先生は兄弟子でしたよね。

山本：学部の 4 年の時に彼は博士課程の 3 年で，その後は助手をやっていたんですよ。意外に思うかもしれないけれども，彼はもともと子どもの臨床はやったことがなくて，僕がたまたま子どもの臨床をやりたいと修士に入った時に言ったら「じゃあ久里浜（当時，国立特殊教育総合研究所）紹介するよ」と言ってくれて。彼は日吉キャンパスの助手で，子ども用のプレールームなどなかったけれど，そこに子どもを連れてきて，廊下を使って色々実験をやって。研究というのはアイディアの持ち寄りですよね。僕が日吉に話に行くと，可愛がってくれて，色々と教えてくれましたね。その時の彼はいつも一言居士みたいに，例えば「般化がないのは良い知らせってお前わかるか？」と言ってくる。自分で考えて「こうじゃないですか」って言ったら「まだわかってないな」みたいに言われたりして。きちんと物事を突き詰めて考えた人にガツンとかましてもらったという経験が今に活きていますし，井上さんがおっしゃったように，2021 年の論文にも活かされていますね。あえて目的的に書いたっていうか。望月さんが体調悪くて引退されていることを知っていたから，ある種のオマージュ的なところが入っているんです。そこを読み取っていただいて，ありがとうございます。

井上：後輩たちや山本先生の教えを受けた多くの生徒さんが先生の研究や思想を引き継いで，今後も発展させていかれると思います。私は先生の年齢マイナスだいたい 10 歳ぐらいなので，先生の当時のお仕事と自分の今やっていることとを照らし合わせながら，自分も，もうちょっと頑張らんといかんなぁと力にさせていただいています。

図 1. 対談画面のスクリーンショット (左：山本先生，右：井上先生，下：石塚)

山本：井上さんの背中はうちの学生たちも見ていますね。慶應の大学院での集中講義でもインパクトのある臨床の話をしていただいているので，大変勉強になります。僕はやっぱり望月先生に鍛えられたので，何のために研究をしてるのかというのが，ずっと頭にこびりついてます。僕の研究には「あいつらには絶対負けん」というルサンチマンがあって，闘って倒してやりたいって思ってやってきましたね。その時にいちばん賢いものを作れれば，僕は自分の頭の中で「あ，これ，わかった。勝負あった。」と思えるので，次に進んでいくことができる。この繰り返しなので，幸せ感というのがずっとありました。

井上：ありがとうございました。僕は修士の 1 年生の時に同じ時期につくばに来られた山本先生に出会い，そしてともに子どもたちを指導する中で実験的な行動分析を学ばせていただきました。それは私にとっても，当時の小林先生の研究室で学んでいた多くのスタッフにとっても，めちゃくちゃ強いインパクトになりました。あの時期に「おーし，学問するぞ！」という先生の言葉とともに，時間無制限に議論し，学ばせていただくことができたことは本当に良かったと思っています。これからもまた新たなステージで研究や臨床活動をなされると思います。今後ともよろしくお願いします。

引用文献

出口光・山本淳一（1985）．機会利用型指導法とその汎用性の拡大：機能的言語の教授法に関する考察　教育心理学研究，*33*, 350–360.

Fenske, E. C., Krantz, P. J., & McClannahan, L. E. (2001). Incidental teaching: A non-discrete-trial teaching procedure. In C. Maurice, G. Green, & R. M. Foxx (Eds.), Making a difference: Behavioral intervention for autism (pp. 75–82). Austin, TX: Pro-Ed.

刎田文記・山本淳一（1991）．発達障害児における”内的”事象についての報告言語行動（タクト）の獲得と般化　行動分析学研究，*6*, 23–40.

Hart, B., & Risley, T.R. (1978). Promoting productive language through incidental teaching. *Education and Urban Society*, *10*, 407–429.

Lovaas, O. I. (1987). Behavioral treatment and normal educational and intellectual functioning in young autistic children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *55*, 3–9.

松﨑敦子・前田卿子・山本淳一（2019）．自閉スペクトラム症幼児の保護者を対象にした「アプリを用いたペアレン

トトレーニング」の効果：地域型発達支援モデル　子どもの心とからだ，日本小児心身医学会, *28*, 2–11.
奥田健次・井上雅彦・山本淳一（1999）．発達障害児における文章理解の指導-情緒状態の「原因」を推論する行動の獲得- 行動療法研究，*25*, 7–22.
望月昭・武藤崇（2016）．応用行動分析から対人援助学へ―その軌跡をめぐって―　晃洋書房
佐久間徹（2013）．発達障害児への応用行動分析（フリーオペラント法）　二瓶社
Sidman, M., & Tailby, W. (1982). Conditional discrimination VS. matching-to-sample: An expansion of the testing paradigm. *37*, 5–22.
Sidman, M., Rauzin, R., Lazar, R., Cunningham, S., Tailby, W., & Carrigan, P. (1982). A search for symmetry in the conditional discriminations of rhesus monkeys, baboons, and children. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, *37*, 23–44.
清水裕文・山本淳一（1998）．発達障害児における授与動詞の獲得：高次条件性弁別による文法の形成可能性の検討　行動分析学研究，*12*, 22–43.
Skinner, B. F. (1957). *Verbal behavior*. New York: Appleton-Century Crofts.
Smith, T., (2001). Discrete trial teaching in the treatment of autism. *Focus on Autism and Other Developmental Disabilities*, *16*, 86–92.
ウィノカー S（著）佐久間徹・久野能弘（訳）（1984）．スキナーの言語行動入門　ナカニシヤ出版
山本淳一（1985）．自閉児における刺激過剰選択性：治療教育方法の検討　慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要，*25*, 45–54.
山本淳一（1987）．自閉児における刺激等価性の形成 行動分析学研究，*1*, 1–21.
山本淳一（2001）．言語の獲得と拡張：条件性弁別と刺激等価性．日本行動分析学会（編）山本淳一・浅野俊夫（責任編集）ことばと行動：言語の基礎から臨床まで（pp.49–74）　ブレーン出版
山本淳一（2009）．「対称性」の発達と支援　認知科学，*16*, 1–16.
山本淳一（2012）．行動リハビリテーション　臨床心理学，*12*, 34–40.
山本淳一（2021）．徹底的行動主義と応用行動分析学：ヒューマンサービスの科学・技術の共通プラットフォーム 行動分析学研究，*35*, 128–143.
山本淳一・加藤哲文（編著）（1997）．応用行動分析学入門：障害児者のコミュニケーション行動の実現を目指す　学苑社
山本淳一・國枝ゆきよ・角谷敦子（1999）．発達障害児におけるセルフ・マネージメント・スキルの獲得と般化　発達心理学研究，*10*, 209–219.
山本淳一・楠本千枝子（2007）．自閉症スペクトラム障害の発達と支援　認知科学，*14*, 621–639.
山本淳一・松崎敦子（2014）．早期発達支援プログラムの開発研究　臨床心理学，*14(3)*, 361–366.
山本淳一・松﨑敦子（2016）．早期発達支援プログラム　下山晴彦・村瀬嘉代子・森岡正芳（編著）必携発達障害支援ハンドブック（pp.81–87）金剛出版
山本淳一・直井望（2006）．共同注意：発達科学と応用行動分析の研究コラボレーション　自閉症スペクトラム研究，*5*, 17–29.
山本淳一・清水裕文（1998）．高次条件性弁別は “理論” か？ “事実” か？：室伏論文への回答　行動分析学研究，*12*, 49–52.
山本淳一・土屋立（2001）．発達障害への実験発達心理学と行動的支援：帰納科学の可能性　児童心理学の進歩，*40*, 184–212.

注 1　私（山本）は，博士課程在学中に，毎週まる 1 日，三好隆史先生が創設した「心理・行動研究所」（東京都目黒区）で，自閉症のある幼児・児童の臨床を行っていた。三好氏は，梅津耕作先生の精神医学研究所のチームで自閉症児の行動療法を，先駆的に実践され，その後，UCLA の Lovaas 先生のもとで学ばれ，帰国後に，同研究所を設立された。以下の本は，DTT プログラムの課題と実施手順，行動理論の背景が詳細に書かれており，今でも十分に臨床に活用できる。梅津耕作（編著）自閉児：お母さんと先生のための行動療法入門．有斐閣．

著者紹介

井上雅彦（いのうえまさひこ）鳥取大学大学院 医学系研究科 教授

Inoue, M., Inoue, N. (2021). Effects of Behavioral and Functional Training on Japanese Preschool Teacher Knowledge and Child Behavior. *Journal of Positive Behavior Interventions*, doi:10.1177/1098300721993531

井上雅彦（編著）(2015)．家庭で無理なく対応できる困った行動 Q&A　学研教育出版